

第78回

# 休日の午後のコンサート。

11.4(日)14:00開演  
東京オペラシティ コンサートホール  
Sun. November 4, 2018, 14:00  
at Tokyo Opera City Concert Hall

## 〈ザ・コバケンI〉

The Kobaken I

指揮とお話 小林 研一郎  
Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

チェロ 北村 陽\*  
Yo Kitamura, cello \*

コンサートマスター 近藤 薫  
Kaoru Kondo, concertmaster



chie k.

J.S. バッハ(ストコフスキー編):  
トッカータとフーガ 二短調 BWV 565 (約10分)  
Bach/Stokowski: Toccata and Fugue in D minor, BWV 565 (ca. 10 min)

チャイコフスキー:  
ロココの主題による変奏曲 イ長調 Op.33 \* (約20分)  
Tchaikovsky: The Variations on a Rococo Theme, Op. 33 \* (ca. 20 min)

— 休憩 (約15分) —

リスト:ハンガリー狂詩曲第2番 嬰八短調 (約10分)  
Liszt: Hungarian Rhapsody No. 2 in C sharp minor (ca. 10 min)

リスト:交響詩『レ・プレリュード』 S. 97/R.414 (約17分)  
Liszt: Symphonic Poem "Les Préludes" S. 97/R.414 (ca. 17 min)

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団  
助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会  
Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra  
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council



11/4

## 小林 研一郎 指揮とお話

Ken-ichiro Kobayashi, conductor &amp; speaker

東京藝術大学作曲科および指揮科卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。ハンガリー国立交響楽団音楽総監督、日本フィル音楽監督、アーネム・フィル常任指揮者をはじめ、国内外のオーケストラのポジションなどを歴任。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、星付中十字勲章、2010年にはハンガリー文化大使の称号が授与されている。2011年文化庁長官表彰を受ける。2013年秋の叙勲で旭日中綬章が授与された。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、読売日響の特別客演指揮者、九州交響楽団の名誉客演指揮者、東京文化会館音楽監督、東京藝術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院名誉教授などを務める。



©K. Miura

小林研一郎オフィシャル・ホームページ <http://www.it-japan.co.jp/kobaken/>

## 北村 陽 チェロ

Yo Kitamura, cello

2004年兵庫県西宮市生まれ。2017年、第10回若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール優勝。佐渡裕とスーパーキッズ・オーケストラに最年少(小2)で入団し、東日本大震災被災地での公演に参加する。9歳でオーケストラと初共演、10歳で初リサイタルを行う。これまでに関西フィル、東京響、大阪フィル、兵庫芸術文化センター管、山形響、中部フィルと共演。2018年5月にロシアで開催されたチャイコフスキー国際青少年フェスティバルに招待される。テレビ朝日「題名のない音楽会～神童たちの音楽会2017」、BSジャパン「エンター・ザ・ミュージック」、日本テレビ「news every.」等に出演。第37回草津夏期国際音楽アカデミー奨学生。山崎伸子、太田真実、故ギア・ケオシヴィリ各氏に師事。2017年関西元気文化圏賞ニューパワー賞受賞。



使用楽器は、上野製菓株式会社より貸与されている1668年製「カッシーニ」。

## プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

11/4

## 炎のコバケンが贈るオーケストラ・アレンジの興味と “恐るべき才能”

今回の「休日の午後のコンサート」は、「ザ・コバケン」。来年1月の「平日の午後のコンサート」の「ザ・コバケンII」と併せて、円熟を極める“炎のマエストロ”が、オーケストラ音楽の醍醐味を堪能させてくれます。

今回のプログラムには、ポピュラーな作品が並んでいます。しかしながら、チェロをフィーチャーした「ロココの主題による変奏曲」以外の3曲は、別の形態がオリジナルである点が面白いところ。「トッカータとフーガ」はオルガン曲、「ハンガリー狂詩曲」はピアノ曲、「前奏曲」は別の合唱曲の序曲を変化させたものです。それゆえオーケストレーションに趣向が凝らされていますので、コバケンがいかに壮麗なサウンドを生み出すか？ 大いに楽しみです。

「ロココ～」のソコを弾く北村陽は、今年まだ14歳。9歳でオーケストラと初共演した恐るべき才能の持ち主ですから、コバケンのサポートを得てどんなパフォーマンスを見せるのか？ こちらも大注目です。



2018年2月の「休日の午後のコンサート」より「マエストロへの質問コーナー」でのひとコマ。

©上野隆文

11/4

## J.S.バッハの壮麗なオーケストラ・アレンジ

幕開けは、ドイツ・バロック音楽の巨匠ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)のトッカータとフーガ 二短調。テレビ等で頻繁に耳にする、バッハ最大の人気オルガン曲です。1706年頃の初期作品とみられていますが、正確な作曲年はわかっておらず、実は別人の作との見方もあります。なお、「トッカータ」はイタリア語の「触れる」に由来した用語。自由で即興的な鍵盤楽器音楽のタイトルに用いられています。

曲は、才気と情熱に溢れた音楽。力強い下行音型に始まる荘厳なトッカータと、ヴァイオリン風の細かな動きをもったフーガが切れ目なく続き、トッカータが激しく再現された後、壮大な終結を迎えます。

編曲は、イギリス出身の大指揮者レオポルド・ストコフスキー(1882-1977)。彼は、アメリカのフィラデルフィア管弦楽団を世界屈指の存在に育て上げ、自身出演した「オーケストラの少女」(1937)や「ファンタジア」(1941)といった映画の音楽でも知られています。バッハの鍵盤楽曲や声楽曲などの管弦楽編曲は30曲以上。本作はそれらを代表する壮麗なアレンジです。



ヨハン・セバスティアン・バッハ



レオポルド・ストコフスキー

## ロシアの巨匠チャイコフスキーの優美な変奏曲

代わって、19世紀ロシアを代表する作曲家ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)のロココの主題による変奏曲。チェロの協奏作品の中でも最上位クラスの人気曲です。生涯最初の充実期の1876年12月から1877年1月にかけて、モスクワ音楽院の教授=チャイコフスキーの同僚だったドイツ出身のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン(1848-1890)のために作曲され、1877年11月に初演されました。「ロココ」とは、18世紀フランスのルイ15世の宮廷から始まった、バロックに続く美術様式で、ここでは宮廷的で優美な趣を意味しています。

しかしこの曲、初演前にフィッツェンハーゲンが独奏パートを変更した上、無断で第8変奏をカットし、変奏の順番も大幅に入れ替えてしまいました。しかもそのまま出版され、改変版によって広く普及していきました。ちなみにチャイコフスキー本人は、改変による効果を内心認めていたのか、正式に異を唱えませんでした。なお、20世紀半ばに復元された原典版も、今ではチャイコフスキー国際コンクール等で採用されています。ただ本日は、一般に馴染み深いフィッツェンハーゲン版で演奏されます。

曲は、イ長調の主題と7つの変奏が、多彩な楽想とともに展開される、繊細で抒情的な音楽。ソリストには高度な技巧と高音域でのこまやかな表現が求められます。短い序奏の後、チェロが優美な主題を呈示。第1、第2変奏では主題が細かく刻まれ、第3変奏では美しい歌がたっぷりと奏されます。ここは白眉ともいえる部分。民族的な第4変奏、フルートの旋律をチェロが装飾する第5変奏からカデンツァを経て、哀愁漂う二短調の第6変奏へ。そして快活な第7変奏とコーダで華麗に締めくくられます。



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー



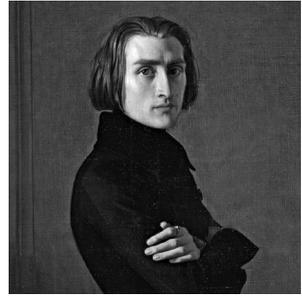
ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン

## 大ピアニストで作曲家、 リストの看板曲「ハンガリー狂詩曲第2番」

後半は、歴史的な大ピアニストでもあったフランツ・リスト(1811-1886)の作品。まずはハンガリー狂詩曲第2番です。ドイツ系の両親のもとにハンガリーで生まれたリストは、10歳まで暮らした当地でジプシー音楽等に興味を抱きながら育ち、その後、2度のハンガリー演奏旅行の際に収集した素材を使って、4つのピアノ曲集を作曲しました。これらを再構成したのが、19曲から成る『ハンガリー狂詩曲集』。同曲集は、リストの作品の中で最もポピュラーな存在となり、1847年に作曲された第2番は、彼の看板曲にもなっています。

曲は、ハンガリーの舞曲「チャールダッシュ」の形式に則り、ラッサンと呼ばれる遅い部分とフリスカと呼ばれる速い部分から成っています。短い序奏で重々しく開始。次いで悲壮感漂うラッサンに入り、荘重な主題を中心に進みます。やがて躍動的なフリスカに移り、新たな旋律(曲全体で10もの旋律が用いられています)が次々に登場しながら、華やかな盛り上がりを見せていきます。

今回は、ドイツのヴァイオリニスト、指揮者、作曲家カール・ミュラー＝ベルクハウス(1829-1907)の編曲による演奏。耳にする機会の多いこの版は、嬰ハ短調の原曲がハ短調に移調されており、華麗なサウンドとクラリネットの活躍が際立っています。



フランツ・リスト



カール・ミュラー＝ベルクハウスの弦楽四重奏団

## 交響詩『前奏曲』 ——「レ・プレリュード」

最後は交響詩『前奏曲』。当初大人気のヴィルトゥオーゾ・ピアニストだったリストは、1848年からドイツのワイマールに居を置き、活動の中心を作曲へシフトします。そこで創出したのが「交響詩」。ベルリオーズの『幻想交響曲』などから想を得た一種の標題音楽で、文学的・絵画的内容を詩的に表現した管弦楽曲です。



詩人ラマルティエヌ

彼は13の交響詩を作曲しました。その代表作が、1854年に完成&初演された第3作『前奏曲』です。ここで言う「前奏曲」は、何かの作品の“前奏”曲ではなく、「人生は死への“前奏曲”である」という標題に拠るもの。本作は、リストが記した「我々の人生は、死への前奏曲にほかならない。愛の喜びは激しい嵐に中断され、静かな田園生活に救いを求める。しかし長く安住はできず、自らを獲得する戦いへ出かけていく」(要約)といった内容を音にした交響詩で、文言はフランスの詩人ラマルティエヌの「詩的随想録」の一篇に基づいています。

しかしこれ、実は“後付け”です。曲は元々、1844～1845年に書かれた男声合唱曲『四大元素』の序曲で、別人の歌詞による合唱曲の旋律を繋いだもの。リストは、既成の曲を改訂し、音楽に合う詩をあてがって交響詩に仕立てたわけです。ただ、以下のように上手くはまってもいます。

曲は、緩-急-緩-急の4部分がひと続きになった一種の変奏曲。**第1部**は、低音弦楽器が死へ向かう人生の始まりを暗示する主題、ホルンが愛を表す主題を出し、これらが様々に変化していきます。**第2部**はテンポを速めて人生の嵐が描かれ、ファンファーレも交えて高揚します。**第3部**は、ホルンの牧歌的な旋律を軸にした、平安な田園生活の様子。**第4部**は運命に挑む勇壮な行進曲で、激しい音楽が続き、華麗に終結します。

しばたかつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。